

# 創業の精神

『創業の精神解説主義』

阿波製紙株式会社

2008年10月1日制定

2017年4月1日改訂

2019年4月1日改訂

2023年4月1日改訂

## < 創業の精神の制定について >

まず最初に「創業の精神」策定の意義について説明したいと思います。私たちは、阿波製紙株式会社という運命共同体の一員として生活しています。私は、縁あってこの会社に入社してくださった皆さんに深い思いを抱いています。数多い会社の中で、当社阿波製紙株式会社の一員となって共に働いていただけることに心から感謝しています。

「企業は人なり」とよく言われます。私たちは、「顧客に最適な機能を提供し、環境に優しく、便利で快適な生活と文化を創造する」会社です。商品力だけでは、競争には決して勝てません。社員一人一人の人間力と、サービスの品質がなければ、お客様に信頼していただくことはできないのです。そのことを常に念頭に置いていただきたいのです。

阿波製紙は、大正4年（1915年）11月10日大正天皇即位礼の佳日に徳島の主要産業人7名が集い、地域経済の発展と未来の夢を託し発起人会が開催され、翌年2月12日に27名の株主により株式会社が設立されました。

この「創業の精神」は、株主の会社への思い入れと今日に至るまで必死に努力を積み重ねてきた歴代経営者の事業への思い・お客様への思い・一緒に働いた皆さんへの思い・生き様いきざまが投影されたものです。本日この「創業の精神」を目にされ、耳にされた全員にこの精神が継承されることを心から願っています。

「経営理念」と、これから策定する中期ビジョン・年度経営計画（戦略や戦術）は、すべてこの「創業の精神」をベースにして構築されなければ命を持つことができません。当社の企業文化・組織風土の根本にあるものが、この「創業の精神」に集約されていることをご理解ください。

# 創業の精神

## <社会への貢献>

- 徳島県の豊富な水資源と山林資源を活かした新産業を立ち上げ、地域経済に貢献したい

## <文化・文明の創造>

- 安価で高品質な和紙をつくり、人々のより快適な生活と文化の発展に貢献したい

## <独創性の発現>

- 最新の技術と設備で、時代の先端をいくオンリーワン製品をつくりたい

## <相互信頼の醸成>

- 社会の人達から信頼される、夢のある会社をつくりたい

## <社員幸福の実現>

- 社員のより豊かな生活と幸せを追求したい

## <社会への貢献>

### ○ 徳島県の豊富な水資源と山林資源を活かした新産業を立ち上げ、地域経済に貢献したい

(解説) 大正4年(1915年)11月10日、大正天皇即位礼の佳日に三木與吉郎<sup>よきちろうやすじ</sup>康治以下有志7名が集まり、阿波製紙の設立発起人会が開かれました。それは「徳島経済を何とかしないといけない。」という危機感と旺盛な起業家精神をもって、徳島県初の機械抄き和紙メーカーを設立しました。株主は発起人の方をはじめ何れも徳島県内の主要産業人27名であり、かつて藍の豪商で名を馳せた方々が過半数を占めていました。

明治初期の徳島は、全国10大都市のひとつに数えられるほどの経済規模を誇っていました。それは吉野川流域に広がる肥沃な土壌に育まれた良質な藍の染料(藍玉)を水運により全国に供給、市場の90%を占有し富を蓄えたことにより、全国長者番付の上位に阿波の豪商が顔を揃えているほどでありました。しかし明治中期に入り、インドから安く取り扱いの易しいインド藍が多く輸入され、更にドイツからは最新の技術による化学染料が導入される等、工業化に伴う染色の技術革新も合わさり、地場産の藍玉は壊滅的な影響を受け衰退していきました。

三木家も藍の豪商に名を連ねていましたが、そのような外部環境が大きく変わっていくなか、守旧派との確執を乗り越えて、地場のみの藍商から輸入品との併売に転じる決断をしました。そしてインド藍やドイツからの化学薬品の輸入商社へ事業転換を図りました。決断が出来ず、転換を図れなかった藍商

の名前をいま聞くことは出来ません。

三木の家は、別所規治が慶長9年（1614年）阿波蜂須賀軍に従って大坂の役で水軍として功績を挙げたのち三木與吉郎と称し徳島で帰農したところから始まります。当初は、漁具、米穀<sup>べいこく</sup>や雑品類を商っていました。延宝2年（1674年）阿波藍の取り扱いを開始し、その後次第に栄えていきますが、決して順風満帆と推移して来た訳ではありません。明治が始まるころは全盛を極めていたものの、維新政府下における経営環境の変化にどう対処すべきかについては、江戸からできるだけ多くの情報を収集して判断材料とし、本業の進路を誤らないよう努めてきました。

明治41年（1908年）與吉郎康治は、33歳で12世を受け継ぎ、家業の染料及び化学薬品部門だけでなく、造酒業や北海道の海産物なども積極的に取り扱いを始めました。その後も13世與吉郎真治と共に、時代の変化に対応すべく満州、中国、朝鮮、東南アジア一帯の外地で販売するなど海外に活路を設け、リスクを背負って事業を拡大していきました。

このように阿波製紙が誕生した大正初期は、多くの経済人が新規事業に対し積極的に投資をしていた時代でもありました。そんな中、阿波製紙は、豊富な水資源と山林資源に加えて藍商の資本を活かし、最新の技術によって、地域経済発展の一翼を担うべく設立されたのであります。

私はこの創業の精神を大切に、創業以来今日まで支えてくれた地域の人々や自然環境の恵みに感謝し、その恩義に応えていきたいと思えます。グループ各社・各工場は、それぞれの地域に密着し根を下ろした行動で、地域社会の活性化に貢献していきましょう。

## <文化・文明の創造>

### ○ 安価で高品質な和紙をつくり、人々のより快適な生活と文化の発展に貢献したい

(解説) 徳島県はもともと山間部から「楮」<sup>こうぞ</sup>「三桮」<sup>みつまた</sup>の和紙原料が大量に産出し、早くから農家の副業として手漉きの障子紙など四ツ幅半紙や傘紙が作られていました。そして大正初期の頃は、徳島市内の吉野川、鮎喰川の流域に手漉き和紙の業者が相当集まっていたようです。楮・三桮を使った日本の和紙は世界的にも評価の高い品質を備えていましたが、家内工業的な小規模な生産に留まっていたため、値段も高く供給も充分ではありませんでした。

天然の阿波藍よりも工業化に適した人造藍（化学染料）を積極的に海外から導入したことで、庶民にも安価で便利な藍染めの製品が簡単に手に入り、広く普及していきました。同じように安くて良質な和紙を広く世の中に浸透させていくことが、人々のより快適な生活と文化の発展に貢献していくことと考え、量産できる機械抄き和紙事業をスタートしました。主な商品としては書道用半紙やチリ紙など薄葉紙<sup>うすようし</sup>を生産し、各地紙業者に見本として発送したところ、「品質の優れているところで多大な称賛を博した」と記録されています。

紙は文化のバロメーターといわれますが、わが社は紙の可能性を創造し、環境との調和を見据えた生活文化を提案できるような製品づくりを使命としていかなければならないと考えています。これからも更に高まっていくであろう多様なお客様のご要望を先取りすべく、和紙からスタートした機能材

料を進化・発展させ、皆さんと共により快適な生活と文化の発展に貢献していきましょう。

## <独創性の発現>

### ○ 最新の技術と設備で、時代の先端をいくオンリーワン製品をつくりたい

(解説) 創業当時すでにヨーロッパから機械抄きの洋紙製造技術が導入され、和紙においてもその生産方法が注目されていました。徳島は豊富な水と和紙の原料に恵まれ、数多くの手漉き和紙業者が存在していましたが、未だ機械抄きの設備も技術もありませんでした。一方、水運を得た地の利や藍商が使用してきた物流網、人脈さらに情報収集力から東京や大阪に有望な市場を見出していました。あとは新たな和紙市場を開拓するため、品質・コスト面での競争力を有した製品をつくるだけです。

そこで名東郡加茂村大字矢三村字野神に用地約 5,000 坪を買い入れ、本社事務所として和洋折衷構造の 2 階建て本館をはじめ抄紙場、機械工場、倉庫など 16 棟の建築に着手しました。将来を見据え時代の先端をいく製品を安く多くの人に使ってもらいたいとの思いから、東京の鉄工所に紙幅三尺のまるあみ円網ヤンキーマシンを発注し、大正 6 年 5 月にガス瓦斯発動機などと共に据え付けました。製造技術に関しては多年の経験を持つ技師長を高知から招き、県内初の機械抄き和紙の生産をはじめたところ、予想以上の反響を呼んで生産が追いつかない状態になりました。

約 1 世紀前からわが社は時代の変化を先取りしてチャレンジし、高付加価値のあるものをつくってきました。この「チャレンジ精神」と「ものづくり精神」をしっかりと受け継いでください。そして最新の技術と設備で、時代の先端をいくオンリーワン製品をつくっていきましょう。



## <相互信頼の醸成>

### ○ 社会の人達から信頼される、夢のある会社をつくりたい

(解説) わが社は、大正5年(1916年)に27人も多くの株主の支援を受け、資本金10万円という大資本を集め設立し、2年後の大正7年(1918年)には、事業拡大のためさらに8人の新たな株主を迎えると共に資本金を30万円へと増資しました。これは地域の経済界や社会から、わが社の事業が発展し、産業の振興・雇用・納税を通じて広く地域に貢献して欲しいという強い思いや、やるからには是非業界No.1の企業になってほしいという期待が込められています。時代の変化に合った近代的製紙業は、必ず世の中のためになるという信念のもと始めたのです。

だからこそわが社は、創業以来「道徳経済合一」主義のもと自らを律して高い倫理観をもった経営を実践すると共に、お客様から信頼される良質な製品をお届けし、利益を上げることを目指してきました。そのことが出来て、はじめて雇用を守り、適正な税金を納めることができます。

また私たちが日常で生産活動するということは、何らかの公害を起こし、環境負荷などの問題を起こしているということを認識しなければいけません。たとえば、ボイラー1つ焚くことによっても排気ガスやCO<sub>2</sub>を発生させています。このことは、世の中に必要なものを生み出していくには必要なことですが、我々はそれを最少にする努力をしていかなければならないし、必要な投資はやるべき時に断固としてやらねばなりません。法を犯していなければよいという事ではなく、規制などに触れてなければ構わないということでもありません。環境負荷をかけず、人にも自分たちにも安心と安全を心

掛けてください。

これからも人権活動や労働問題のような地域の課題解決に率先して取り組むリーダーカンパニーとして社会の人達から信頼される会社をつくっていきましょう。そして誰にも出来ない、誰もしたことがないような事へチャレンジしていく会社、世界一の独自技術を持った会社、今までにない価値を創造し新製品を次々につくり出していくような夢のある会社をつくっていきましょう。

## <社員幸福の実現>

### ○ 社員のより豊かな生活と幸せを追求したい

(解説) 創業以来1世紀を経て、この会社で汗を流し、努力してきた人たちに感謝を申し上げたいと思います。阿波製紙にはOB会があり、その席で90歳近い方までが「えらかったけどよかったな」と阿波製紙の昔話を語ってくれたり、「今、会社はどんなん」と心配して聞いてくれたりします。確かにいろんな辛いことや苦勞したこともあっただろうけど、楽しそうに話されている姿を見たり、親身に聞いてくださるOBの方々と触れ合ったりする中で、創業以来経営陣が社員をいかに大事にして一緒に苦樂を共にしてこられたかを実感します。

創業時の会社は新たな雇用の場を創出し、みんなの夢と希望を最新の設備に託してスタートしました。縁あって入った人は、死ぬまで仲間や家族のようなものだから、「この会社に入って本当によかった」と思ってもらえるように、歴代の経営者は強い信念をもって経営に取り組んでこられたのだと思います。

私は「経営とは人を幸せにすること」だと考えます。「社員みんなが安心して働いてもらいたい。自分の能力を最大限発揮してもらいたい。心も生活も豊かになったと言ってもらいたい。」物心両面におけるみんなの幸せが私の幸せです。

かつて昭和40年代には業績が悪く給与が遅配したこともありましたが、最近では平成9年(1997年)からの金融・経済恐慌時、3期連続赤字という大変な時期もありました。自宅待機をさせたり、管理職の給与カットなど、苦勞をかけながらも辞めずに一緒に心配し、努力してくれた、そんな仲間と協力していけば何でも出来ると思えました。みんなへの感謝の気持ちは忘れることはできません。まともな給

与が出せないことは本当に辛いし、このような苦労は二度とかけたくありません。そうならないような経営をしていかなければなりません。もちろん社長一人で出来ることではないので、皆さんと一緒に協力してしっかりと利益を出し続けていける会社をつくっていきましょう。

また以前、不幸な事故によって尊い社員の命を失うという悲しいショッキングな出来事もありました。社員の安全や健康なくしては家族の幸せも守れません。その後、全社員と共に彼の死を無駄にしないようにと、心に誓って安全管理を徹底させてきました。これは経営者の絶対の責任です。

今日に至るまで様々な困難なことがありましたが、心を合わせて力を合わせて乗り越えてきました。これからもどんなことがあっても、それぞれの良さを活かし合っていけば、絶対に乗り越えられると信じています。何があっても、信じて私について来てほしい。社員みんなで豊かな生活と幸せをつかみとり、「阿波製紙に勤めて本当によかった」と思える会社にしていきましょう。